

岡真理201407281624パレスチナフォーラム

イスラエル軍は、住宅を攻撃する場合、事前に警告する場合があります。事前警告したのだから、殺されたのは、警告にもかかわらず避難しなかった者の責任、というロジックでしょう。

警告の仕方はいろいろです。電話で、録音されたアラビア語のメッセージで「*分後に攻撃するから避難しろ」と告げる。あるいは、その旨を書いたチラシを空から地区一帯に撒く。あるいは、警告ミサイルで屋根を攻撃する・・・・・・（これは、Knock on the roof方式（屋根をノックする方式）とイスラエル軍は呼んでいます。この警告ミサイルで殺される者もいます。）

この事前警告について、二つのテキストをご紹介します。

ひとつは、ムハンマド・ジューダの「自宅から逃げて1000回死ぬか、逃げるのを拒んで1回で死ぬか」と、ラーミー・アル＝メガリーの「イスラエルはわれわれに死んでほしがっている、だが、我々はここにとどまる」です。

日本語だと、「命」と「生活、人生」はそれぞれに別の言葉ですが、アラビア語の hayat(ハヤー)は、英語の life と同じように、「命、人生、生活」を意味します。警告に従って、逃げれば、「命」は助かるかもしれませんが。でも、家と、生活のすべてが破壊されるのです。「家」は、単に雨露をしのぐための箱ではありません。それは、自分の人生や生活のすべてがあります。逃げれば命という「ハヤー」は助かっても、人生や生活という「ハヤー」は破壊されてしまうのです。それもまた、人間にとっては耐え難い死なのだということを、ムハンマド・ジューダの文章は教えてくれます。

避難しろと警告されても、ガザの人々にはそもそも避難する場所などどこにもありません。ないにもかかわらず、イスラエルは、民間人を標的にしていないと抗弁するために、形ばかりの警告をします。ラーミー・アル＝メガリーの文章を読むと、事前警告が、いかに人間を愚弄する行為であるか分かります。

■■-----

ガザの証言(1)

自宅から逃げて1000回 死ぬか、逃げるのを拒んで1回で死ぬか

2014年7月17日 マフムード・ジューダ

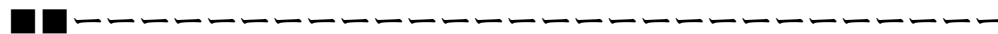
IMEU

<http://imeu.org/article/testimony-from-gaza-you-leave-your-home-to-die-a-thousand-times-or-refuse-t>

イスラエルのミサイルでガザで死ぬことより困難なこととは何か。より困難なのは、イスラエル軍から、自宅を10分後に爆撃するから避難しろと電話で告げられることだ。想像してほしい。10分。それで、この地上におけるあなたのささやかな歴史がすべて消し去られてしまうのだ。

貰った贈り物、兄弟や子どもたち（亡くなった者であれ生きている者であれ）の写真、あなたが大切にしている物、お気に入りの椅子、本、最近読んだ詩集、外国に暮らす妹からの手紙、あなたの愛していた者たちの形見の品、ベッドの香り、西側の窓の外に茂るジャズミンの木、娘の髪留め、昔の洋服、礼拝用の絨毯、妻のゴールドの飾り、あなたの貯金。想像してほしい、これらすべてが、10分のあいだにあなたの目の前をよぎる。驚愕に打たれているあいだに、その痛みのすべてがよぎっていく。

そしてあなたは、古い金属製のキャンディの箱にしまっておいた身分証明書（パスポート、出征証明書等々）を手に、家を出ていく、そして1000回、死ぬのだ。あるいは、出ていくのを拒み、一思いに死ぬ。



ガザの証言 (2)

イスラエルは我々に死んでほしがっている、だが、我々はこちらにとどまる。

ラーミー・アル=メガリーエレクトロニック・インティファダ <http://electronicintifada.net/content/israel-wants-us-die-we-will-remain/13613>

2014年7月21日

「イスラエルは、ガザの民間人はわが身を危険にさらしているから、イスラエル軍が作戦を展開する地区を離れなければならない、と主張している。」アメリカのラジオ局との電話インタビューでぼくが語ったことの一つだ。

インタビューを受けたのは、ぼくが、4人の子どもたち、慢性的な病気を患っている妻、そして老いた母親といっしょに、マガーズィ難民キャンプの自宅を追い出されてわずか数時間後のことだ。ぼくたちは今や、イスラエルによるガザに対する身の毛もよだつ爆撃が続くなか、自宅から避難することを余儀なくされた10万以上ものパレスチナ人の仲間だ。幸運にもぼくらは3キロ離れたところにいた親類のもとに身を寄せることができた。今、ぼくらは、一部屋に31人がすし詰めになっている。

だが、このちっぽけなガザでは、どこにいようと安全などという感覚はもてない。何もかもがすぐそこだ。とりわけ、絶え間なく聞こえてくるイスラエルの爆撃と砲撃がそうだ。

それは、こんな家だった。ガザのどこにでもあるような家。月曜の朝早く、ハーン・ユニスにあるアブー・ジャーミー家の自宅をイスラエルが破壊し、少なくとも家族26名がこの世から消し去られたのは。ここ、この家にいるぼくらと同じように、そこでも、男たち、女たち、老いも若きも、そして幼い子どもたちが身を寄せ合っていたのだ。

ぼくたちが家を離れたのは、マガーズィと近隣のアル=ブレイジュ難民キャンプの住民に電話があり、録音されたアラビア語のメッセージが、直ちに家を離れろと命令し、さもなければガザ市東部のシュジャイヤ地区と同じ運命に直面することになると警告したからだ。日曜日に起きたイスラエル軍の集団虐殺で [シュジャイヤでは] 少なくとも66名が亡くなり、数百名が負傷した。

月曜になると、14日間にわたるイスラエルの攻撃の死者数は、一挙に500人に跳ね上がった。家族全員が殺された家庭も複数ある。負傷者は3000人以上。死者の圧倒的多数は民間人だ。そして5人に一人が子ども。

どこに行けと言うのだ？

ぼくのホームタウンであるマガーズィはガザ地区中央部の東に位置する。「我々、ガザの住民が、イスラエル軍 [のスポークスパーソン] に電話で、世界でももっとも人口の密集していると思われる海岸地帯にある自宅を離れろと懇懇に命令されるなんて、まったくもって不当なことだ」とぼくはラジオ番組で語った。頭に来て、ぼくは叫んだ、「どこに行けと言うんだ？どこに行けと？」

過去2週間にわたって、ぼくら、マガージーやアル=ブレイジュや、シュジャイヤやラファやその他、ガザ地区の北部、東部、南部の多くの場所の民間人は、自宅に閉じ込められて、緊張と不安と、昼夜問わぬイスラエルの爆撃の耳をつんざくような恐ろしい爆音に一睡もできないまま暮らしていた。

完全封鎖されて

そうだ、どこに行けと言うのだ？ガザ地区は、ちっぽけな土地だ。360平方キロしかない。ワシントンDCの2倍かそこら、ロンドンの4分の一程度だ。

ガザの頭部と北部の境界にはイスラエル軍が嚴重に展開していて封鎖されていて、エジプトは、イスラエルを経由しない唯一の陸の境界であるラファ検問所を封鎖している。最後に残された西の境界、すなわちガザの海には、イスラエルの砲艦がわんさといて、岸に向けて砲撃してくる。安全なところなどどこにもないのだ、先週、浜辺でバクル家の4人の少年たちがむごたらしく殺されたように。

だから、どこへ行けと言うのだ。イスラエル軍は電話メッセージでわれわれに、海岸部の街であり難民キャンプであるデイル・エル=バラフにお行きなさいと助言してくださるが、デイル・エル=バラフはマガーズィやアル=ブレイジュからほんの7キロしか離れていない。しかも、ガザ地区でもっとも人口が密集している地区なのに。

デイル・エル=バラフだって、すでに攻撃にさらされている。イスラエルの砲艦や戦闘機がこのガザの街も絶え間なく攻撃しているのだから。どこへ行けと言うのだ？

ガザの住民たちすべてが死と怪我に直面している。イスラエルは、パレスチナの片隅にあるこの小さな土地のありとあらゆる地域を攻撃しているのだから。

どこにいても安全じゃない。人々はイスラエルによる7年にわたる懲罰的封鎖のせいで実に厳しい経済状況のもとで生きてきたから、助けあうことさえままならない。

ぼくらはパレスチナに戻る

家を追われてぼくは問わずにはいられない。シンプルな問いだ。「どこに行けというのか？

イスラエルは我々にどこに行きしてほしいのか？われわれに死ねということなのか？」そうだ、明らかに、彼らはわれわれに死んでほしがっている。彼らの脅しは実行に移された。シュジャイヤの虐殺やさらなる虐殺が日々、証明しているように。

イスラエルはわれわれにどこに行きしてほしいのか？地獄？いや、われわれが行くのは天国だ、そしてわれわれの魂は、お前たちを呪ってやるのだ、国際司法裁判所で、あるいは最後の審判の日に。「国際社会」なるものがこの世でわれわれに正義をなすことを拒否して、男たち、女たち、子どもたちに対する暴虐非道を犯し続ける占領者の側に依然として立ち続けるならば。

オバマ合衆国大統領は言った、自分は「イスラエルの自衛権を支持する」と。オバマよ、お前が言う、この「自衛権」というのは何のことだ？テレビのスクリーンで、あるいは荒廃し、貧困に喘ぐガザ地区から発信される写真で、バラバラになったパレスチナ人の子どもたちの姿を見てくれ。

我々はどこに行くのか？

我々はパレスチナに帰る、われわれ自身の祖国、イスラエルが1948年に盗んだ土地。もう今回だけは、どこにも行くところなどない。1940年代、イスラエルは集団殺戮を行って、祖父たちは避難を余儀なくされたが、われわれは、祖父たちの過ちを繰り返さない。

ぼくたちは逃げない。とどまり続ける。

■ラーミー・アル＝メガリーはガザ地区のジャーナリスト、大学講師。

[翻訳：岡 真理]